

---

# てがみ

やまちゆ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
てがみ

【Nコード】  
N1597J

【作者名】  
やまちゆ

【あらすじ】  
つらつらと綴っただけのショートです。

お目汚しかもしれませんが、コメントいただけたらうれしいです。

・・・これが最後の手紙になるとおもいます。  
とうとう目標が果たせました。

自分でもここまでできるなんて初めは思ってたから改めて  
振り返ると驚きです。

そちらは元気にしてますか？  
僕は元気です。・・・

僕には恋人がいる。

およそ三年前からの付き合いなので、そこそ長い部類に入るので  
はないだろうか。

しかしながら直接顔を合わせたり、デートをしていたのは初めの  
一年だけであつたりする。

彼女は少し、いや、かなり変わった人物だった。おかげで僕は振  
り回されっぱなしの困らされっぱなしだったのを今でもはつきりと  
覚えている。

友人たちは僕が、あつたことやされたことを語っていると大体が  
付き合いを考えたほうがいい、といった旨の返事をしてきたような  
気がする。

彼女の滅茶苦茶な行動や言動には終始踊らされっぱなしだったの  
だが、

僕は不思議と彼女と一緒にいることが当然であり、必然で、とても  
心地よいものだと感じていた。そんな形で僕がド級のMだと疑わ  
れるような日々が一年ほど経ったある日のこと、呼び出されて行っ  
た駅前のロータリーで彼女は大きなリュックサックを背負い、これ  
また大きな旅行カバンを引きずっている姿のまま、突然僕に向かっ  
て言った。

「私、今からどっか別の国でしばらく暮らすから直接会うのはこれでしばらくおあずけね。」

一瞬何を言っているのか、言っていることがどのような意味を持っているのかが理解できずに呆然としてしまった。

彼女は間髪をいれず僕に背を向けて去ろうとしていた。

「ちょ、ちょっと。」

僕が戸惑いの声をあげると、背を向けた彼女はもう一度僕のほうに振り返り、

手のひらより少し大きいくらいの袋をポイツと投げた。

「ばいばい、またねー。」

今までの一年間でも見たことのないような笑顔でそういうと彼女はタクシーを止め、どこかへ走り去ってしまった。

そのとき僕は電光石火とはこのことなんだろうなあ、笑顔可愛かったなーなどと唾然とした表情のまま、まるで関係のないことを考えていた。

完全に混乱していた証拠だろう。

僕はしばらく立ちつくした後我に返り、ロータリーにいても仕方ないと思い家に戻ることにした。

そして自室に入り別れ際に彼女が投げた袋を開けてみた。

中には鉛筆が半ダース、つまり六本と大量の便箋が詰まっております、便箋の一枚目には彼女の文字でこうかかれていた。

・・・入っている便箋に入っている鉛筆で私への手紙を書きなさい、宛先は私の自宅で構わないわ。

いつか鉛筆をすべて使い切るまで手紙を送り続けられたら、私の居場所を教えることにするわね。

私からも定期的に返事をするから、がんばってね。

P.S. 携帯は嫌いなので捨てました、強制ではないけど、あなたも捨てなさい。・・・

「彼女、達筆だなー、わざわざ実家を経由させるなんて徹底的に居場所がばれたくないんだなー、強制じゃないのに命令文なんだなー」

「って意味わかんねえし!!」

この唐突で突拍子もない手紙に対して僕は普段はしないノリ突っ込みなんぞをしてしまった。

「まあ．．でもやるしかないかあー」

主だった理由は無かったのだが、僕は彼女の言うことに従うことにし、まずはじめに携帯を捨てた。

これは少し不便な感は否めなかったが、僕自身もあまり携帯は好きではないのでそこまでの抵抗はなかった。

問題は次だ、鉛筆六本を使い切るなんてどんだけの文量になるんだろう。

今までの人生で鉛筆一本だって完全に使い切ったことはないと思う。

「なるように．．なるかな？」

もうこのあたりからは自暴自棄になっていた。

そんなこんなで始まった手紙をやり取りする生活もようやく二年を迎える。

文章も初めに比べたら格段に上達したと思うし、字自体も綺麗になったと思う。

彼女の実家に送った手紙は、彼女の家族が彼女に再度送っているようだった。

一度だけ家族の人に彼女の所在をそれとなく聞いてみたのだが、まるで答えてくれる様子がなかったので諦めた。

でもこれで最後だ、六本の鉛筆も、もう、全部使い切る。

・・・これが最後の手紙になるとおもいます。  
とうとう目標が果たせました。

自分でもここまでできるなんて初めは思ってたから改めて  
振り返ると驚きです。

そちらは元気になりますか？

僕は元気です。・・・

ここまで書いて一息つく、限りなく短くなった鉛筆で書くのは結構  
大変なのだ。

・・・二年前に手紙を書き始めた時は何が何だかまったく分からな  
かったけど、今は少し分かる気がします。

初めてあなたからの手紙が届いたとき、携帯のメールなどでは味  
わえない何ともいい難い暖かさ、のようなものを感じました。

それに、鉛筆の匂い、紙の匂いがとても心を落ち着かせてくれま  
す。

携帯を捨てたのもそういった気持ちを強く感じられる要因になっ  
ているとも思いました。

手紙なんて不便だと思っていたけれど、僕にはこういったアナロ  
グな手段のほうが性に合っているんだなと感じる次第です。

初めの約束では、この手紙の後にあなたは居場所を僕に教えてく  
れるという形になっていると思いますが、無理はしなくてもいいで  
す。

実は僕、この関係、このやりとりが結構気に入っていたりします。

でも周りの人には変だ、変態だ、とかいろいろ言われました。

会いたくないと言えば嘘になりますが、本当に今も楽しいと思っ  
てます。

それでは、お体には気をつけて。

P S . . 好きです。

・・・

友人たちに、「最近、生き生きしてるよね、人生たのしそう。」  
と言われたことは隠して、最後は本音で。

少し照れながら封筒に便箋をそっと入れ、ポストに入れた。  
ポストから家に帰る間にどのような返事がくるかいろいろ考えた。

手紙を続ける様なら鉛筆を買い足さなくちゃな、とか

居場所がわかったら今度は携帯を投げつけてやるのかな、とか

他愛もないことを思い、ニヤニヤしながら歩いた。

(後書き)

初投稿です、まともに小説のような文を書いたのも初めてです。  
容赦のないコメントなどお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1597j/>

---

てがみ

2011年1月19日08時19分発行